

## 平成22年度 【大学振興会研究奨励補助】研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ヒガチケンイチロウ  
氏名 樋口謙一郎

研究期間 平成22年度

研究課題名 初学者の学習意欲を高める韓国語教材の開発に関する基礎的研究

### 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	樋口謙一郎	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

### 1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

本研究の目的は、韓国語初学者を対象として、日韓交流・ビジネスの上で最低限必要な、かつ応用・発展が容易な韓国語能力を育成する教材の開発を行う基盤を形成することにある。特に、文化情報学部において近い将来に韓国語の授業が開講されることを念頭におき、韓国の生活文化・風習の理解増進、ならびに韓国での滞在や危機管理、コミュニケーションにおいて必要となる韓国語を指導する上でいかなる教材が有用であるかを検討し、この研究をもとに、最終的にはオリジナルの教材を開発することを目指す。

### 2. 研究方法等 (300字程度で記述)

本研究では、想定する韓国語学習者の性別と年齢層をある程度まで絞り込み（具体的なイメージとしては本学の学生）、学習者のニーズや関心に見合った韓国語教材のありかたを、韓国語ネイティブスピーカーの協力を得て検討した。

まず、日本および韓国で出版されている初学者向け韓国語教材を検討した。その際、一般的実用性だけでなく、日本語話者の女性（特に女子大学生）にとっての使いやすさ、語彙・表現の妥当性、関心やニーズの高さに留意し、随時、文化情報学部の学生の意見も聞いた。その上で、韓国語ネイティブスピーカー（日本語・韓国語教師）の協力を得て、韓国語教材の原案の開発を試みた。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究の開始にあたり、まず研究代表者自身の韓国語（朝鮮語）学習の経験についての省察を行った。本研究の目的は、韓国語初学者を対象とする教材の開発基盤の形成にあったが、教材を作成する側が、初学者の学習動機やニーズ、熱意などを思いやり、自らの初心を振り返る作業が不可欠と考えたからである。そこで、韓国語・朝鮮語の学習法に関して、研究代表者の経験および認識を論稿にまとめ、研究代表者が客員研究員を務める他大学研究所の刊行物に寄稿した。

その上で、上述した研究方法に則って研究を進めた。既存の韓国語教材の多くは、性別や年齢、職業など関係なくだれにでも使えることが企図されているものが多いが、かような「平均的な」教材は、学習者の関心やクラス構成によっては、指導語彙や表現、当該教材に採用された場面シラバスが学習者のニーズに合わず、学習意欲そのものを削いでしまうことも考えられる。そこで本研究では、韓国語教材のコンテンツの一般的実用性だけでなく、日本語話者の女性（特に女子大学生）にとっての使いやすさ、語彙・表現の妥当性、関心やニーズの高さについて、文化情報学部の学生の協力も得て検討した。

これと並行して、韓国語教材の原案の開発を目指し、韓国語ネイティブスピーカー（日本語・韓国語教師）との研究協議を数回にわたって実施した。これは現在も進行中であり、近い将来、実際にオリジナルの韓国語教材の開発・製作を行い、文化情報学部の韓国語の授業で活用する予定である。また、これら一連のプロセスについては、自己評価および第三者評価の結果とともに公表する予定である。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①韓国語	②韓国語教育	③教材開発	④
⑤	⑥	⑦	⑧

**5. 研究成果及び今後の展望** (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本研究の成果をもとに、近い将来、実際にオリジナルの韓国語教材の開発・製作を行い、文化情報学部の韓国語授業で活用する予定である。また、これら一連のプロセスを記述し、自己評価および第三者評価の結果とともに、今後、学術論文として公表する構想である。

なお、関連して下記論稿を執筆した。

・(論文・掲載予定) 樋口謙一郎「日本版 OSINT と朝鮮語トレーニング」(池田雅之編『世界のことばと文化』2011年刊行予定、成文堂)